



BookTalk

編集・発行 海南高校図書部
第15号 2012. 9. 5

読書は楽しいものである。ワクワクドキドキ、泣いたり怒ったり喜んだり、じぶんの経験し得ない人生を経験させてくれる。だから私は物語や小説が好きだ。フィクションであるがゆえに、現実の生活の中では見えにくい人間の「真実」に触れることができる。

読書から教訓を読み取ろうとするのはやめた方がよい。つまらないから。夢中になって読んでいくうちに人生のさまざまな真実に触れ、それが結果として自分の生き方につながっていくものだと思う。

若い頃の読書は濫読（らんどく）であった。興味をひかれたものは手当たり次第によんだ。外国文学が多かったように思う。海外旅行がはるかな夢であった時代、本の世界では時間も空間も跳び越えてありとあらゆる世界に旅ができたから。**今日はそんな私の、若い頃に心に残った外国文学の一部を紹介しよう。**

これだけ（？）長く生きていると心に残った本も数々あるが、そのなかで子どもの頃から幾度か読み返したものがある。それは19世紀半ばのフランスの小説家**ヴィクトル・ユゴー**の『**レ・ミゼラブル**』である。これは日本でも有名な小説で、演劇やミュージカルでもしばしば上演されている。翻訳は邦題「噫(あゝ)無情」として1902（明治35年）年に黒岩涙香・訳で紹介されたのが初めらしい。世界中で幾度となく映画化もされ、この2012年にもヒュー・ジャックマン、アン・ハサウェイ主演のハリウッド映画が12月に公開予定である。

私の、この本との出会いは小学校低学年の頃だったように思う。国語の教科書に載っていたものを授業で読んだのが最初である。教科書に載っていたところは、物語のごく最初の部分だった。

主人公ジャン・バルジャンは、貧しさのためにたったひとつのパンを盗み、獄に繋がれた男である。長い刑期を終えて出所した早々に前科者として社会からはじかれ、強い人間不信になっていた。私が初めて読んだところは、ジャン・バルジャンが泊めてもらえる宿もなくさまよい、たどり着いた貧しい教会で司教の無償の愛に触れ、彼の閉ざされたところが開かれていくという感動的な場面であった。



まだ無垢な子どもであった私は、このお話にイチコロでまいってしまった。それから少年少女向けのダイジェスト版のようなもので読み、小学校6年生の時には、書店で見つけた細かい字の並ぶ分厚い完全版を手に入れた。誕生日のプレゼントだった。フランス革命時代を背景としたこの小説は小学生には難しいところも多々あったが、劇的に更生した主人公ジャン・バルジャンの苦闘の人生と、その深い人間愛に涙したのを覚えている。

作者は主人公だけではなく、さまざまな階層の虐げられた人々、苦しむ人々を、愛を込めて描いている。成人してからふと読み

鍛冶先生
(国語科)
essay

クラシックのすすめ

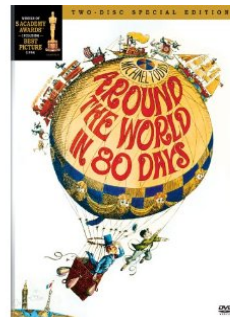
たくなって読み返すことのある本はそう多くない。この本はその数少ない一冊である。この本との出会いが、一時々、我ながら甘っちょろいかなと思うぐらいの——人間に対する楽観的見方を私の中に植え付けたのではないかなと思う。人間は基本的に愛に

満ちた善たるものであると、信じて、信じている私のルーツとなった本である。

もうひとつところを揺り動かされた作品は、やはりフランスの、ノーベル賞作家**ロマン・ロラン**の『**ジャン・クリストフ**』である。これは天才的作曲家ジャン・クリストフの苦闘の生涯を描いた大河

小説である。この主人公のモデルはベートーベンだといわれている。クリストフは芸術、友情、恋愛などに悩みつつ、人間としての真実を貫こうと社会に抗し、孤独な苦難の道をあゆんでゆく。当時中学生だった私は、「なぜ自らこんなに苦しい道をたどるのか」という思いとともに、その激しく力強い「生命の輝き」のようなものに圧倒され、一週間くらい「もの思う少女」モードに入ってしまったて家族ともあまり口をきかなかったのを憶えている。これはかなりの長編で、読み始めは少々忍耐力がいるかもしれない。しかしそこを越えるまで辛抱して読んでみて欲しい。きっと後悔させません（?）。

ほかには、やはりクラシックだが、**いわゆる世界の名作文学に入っているもの**がおもしろかった。ごく一部だが、思いつくままに挙げてみる。



の殺人』、『黄金虫』、ジュール・ヴェルヌ『80日間世界一周』、『地底旅行』、『海底二万里』など。

SF・ファンタジーでは、レイ・ブラッドベリ『なにかが道をやってくる』ロバート・A・ハインライン『夏への扉』、エドガー・R・バロウズの『火星シリーズ』、『金星シリーズ』など。

女性向けではもちろん『赤毛のアン』シリーズ。オルコットの『若草物語』。ジョルジュ・サンドの『愛の妖精』、フランシス・バーネット『秘密の花園』、エミリー・ブロンテ『嵐が丘』、シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』、ジェイン・オースティン『エマ』、『自負と偏見』、パウル・S・バック『大地』などなど。

外国ものは、登場人物の名前を憶えにくくてと敬遠する人が多いけれど、はまるときくと世界が広がると思う。ぜひ挑戦してほしい。

（国語科 鍛冶敦美）

